スピリット・エンフォーサー戦記１００５　序章　―兄弟の旅立ち―

リュウク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スピリット・エンフォーサー戦記１００５　序章　―兄弟の旅立ち―

【Ｎコード】
Ｎ００５３Ｏ

【作者名】
リュウク

【あらすじ】
この物語の舞台は、ガイアと呼ばれる緑溢れる大地と澄み渡る蒼い海が広がるとある星の、南に位置する大陸。　北部・人間に迫害された歴史を持つ血気盛んな獣人達の王国、南部・強大なる力を持ちながらもそれを無闇に振るう事を好まない竜人族（ドラゴニュート）の帝国、北東部・遠い昔に世界の覇権を握ろうとして旧世界の文明を崩壊に導いた愚かなる人間達の子孫が住む騎士皇の国。　南方大陸南の国、『龍帝国ドラゴリオン』。建国千年記念祭を明日に控えたこの国で…

若者達の歩く道は交差し、出会いの刻を迎える。　時はガイア新暦９９５年。　この時点から遡る事３０年前、『冥王戦争』と俗称される冥府の女王・ヘルとの――世界の存亡を掛けた大戦が『新たなる４人の勇者』と呼ばれる若者達を中心とした、多くの命たちの尽力によって平和が取り戻されて久しいそんな時代。　１５歳の誕生日を迎えた混血の双子の兄弟、人間の姿を持つ弟アベルと獣人の姿を持つ兄レグルス。　その日、唐突に両親から聞かされた昔話。そして兄弟は、自分達の目で広い世界を見る為に旅立った…それが、永い旅の始まりだとは知らずに。

第０話　戦いの終わり、それは新しい時代の始まり

序章・上１

―ガイア新暦９７０年―
南方大陸南部　龍帝国ドラゴリオン
　誓いの丘・鎮魂の碑の前

真紅の短髪の少女「やっと終わったな…全く、これでやっと、地上は平和になる。」

銀の長髪の少女「何を言っているのかしら、ガイウス？
　むしろ大変なのはこれからよ……やっと掴んだ平和を、私達みんなが手を取り―力を合わせて、護り抜いていかなくてはならないのだから。
　そうでなければ、何度も死線を潜ってまで生き抜いて、今の未来を掴んだ意味が無くなってしまうわ。
　―そうでしょう？」

……ここは、惑星ガイアの南に位置する大陸、南方大陸南部の中央地帯。

　かつて６つの『神の紋章』を受け継いだ若き勇者達（但し、本当に若かったのはその内の４人だ）―『元祖エンブレムナイツ』と共に力を合わせて『邪悪なる龍神』と呼ばれた古代神・ティアマットを打ち倒した勢力の中心となった１２体の神竜とその眷属が、千年

の昔から住んでいる土地。

血で血を洗う争いばかりを繰り返す悪しき存在―人間をそう断言し、この地上ごと全てを滅ぼそうとしていた彼女は『神の紋章』を受け継いだ若者達・エンブレムナイツと我等神竜の眷属それぞれのリーダーが終結したドラゴンフォース、そして世界中に住むあらゆる種族が力を合わせて立ち向かい、やがて打ち倒された。

その後、神竜達は自分の眷属と共に世界中に幾つも存在する、心力（フォース）が流れるこの惑星の血管とも言える『龍脈』が集中する、地方1つにつき1つずつ存在し心力を循環させるパワースポット『龍洞』へと散って行った。

そしてこの世界の平和と安定を保つ為に長い眠りに付き―その場所はかつての戦いから千年もの長き時が経った今でも、彼等の眷属が守護している。

そして、この南方大陸南部の中央地帯の地下にも龍洞は存在し、其処には『？？？・空間の神竜マイセン』が眠りに付いており―同胞達が神竜と共に世界中の龍洞へと散って行く中、当然のようにその眷属は千年前からこの土地に残り、住み着いてマイセンの眠りを守っている。

前述したように、神竜の眷属の中には世界中に散って行った者達もいれば、祖国と呼べるこの地に留まった者達もいる。

後者は、この地でマイセンの眠りを護る役目を自らに課した天の竜人族（ドラゴニュート）、マイセン一族と共にこの南方大陸南部に国を興した。

虎獣人の青年「フローラの言う通りだな、ガイウス？

……かつて、冥府神ティアマットのように、この地上を滅ぼそうとしていたヘルを力を合わせて倒した…。
やっと掴んだこの平和を護り抜くのが、俺達にとっての本当の戦いじゃないか。」

空色の獅子獣人の少年「ああ―戦おう。
この命在る限り、護りたいものと平和の維持の為に。」

そんな竜人族が住む国『龍帝国ドラゴリオン』、その中心に存在するこの国の首都である『帝都ラスタバン』の郊外に存在し、千年前の戦いでの犠牲者達を葬ったのを始まりとして、千年もの昔から墓地として使われている小高い丘陵地帯、『誓いの丘』。

ちなみに『誓いの丘』とは、千年前のティアマットとの最終決戦の直前に、英雄達…つまりは、エンブレムナイツとドラゴンフォースが必ず1人も欠ける事無く生還すると誓い合い、互いの手を重ね合わせて……事実その誓いの通りに、若き英雄達は1人も欠ける事無く帰還し……新しい、現在の『新暦』の始まりを告げた場所であるから―と言う歴史的事実から来ている、と言う説明を付け加えて置こう。

ともあれ、その一番奥にある真新しい金色の石碑。
無数に刻まれた文面には多くの姓名と『冥府の女王との戦いで失われた全ての命に哀悼の意を示し、同時に再び取り戻した尊き平和を、我らが持つ全ての知と力を以って護り抜く事を誓う
ゴスペル・グラン・マイセン』とある。

『冥王戦争』での犠牲者を弔うものであり―『冥王戦争』とは冥

府を率いる女王、ヘルとの戦いである事から、歴史的事実としての呼称はそう呼ばれるようになった。

その前に立つのは、４人の若者達。

１人は、真紅の短髪の人間の少年。

１人は、銀の長髪の人間の少女。

１人は、空色の獅子獣人の少年。

そしてもう１人は、レモンイエローに黒の縞と言う、標準的な毛色の虎獣人の青年。

揃って『オリハルコンアームズ』と呼ばれる世界最硬の素材を以って造られ、心の成長と共に進化する自分だけの最高の武器防具を纏う彼等は『冥王戦争』終結までの過程に置ける最大の立役者であり、冥府の女王ヘルと直接対峙した―つまり、新しい勇者となった若者達だ。

真紅の短髪の少年「そうだな…まあ、オレ達は、自分なりのやり方で頑張ればいい。」

空色の獅子獣人の少年「ああ…これから進む道は違うとしても、私達が目指す先は同じ……なら、次に集まった時は…この戦いをいい思い出として振り返り、語り合う事も出来るようになる。」

腰に自分と同じく、真紅に輝く燃え上がる炎のような形状の片刃の剣を差した真紅の短髪の少年。

彼は普段は大して気張らないお調子者だが、いざと言う時には神竜の眷属の竜人族すら凌駕する気迫をも見せる――この世界で最も古い神である太陽の化身、太陽神ラーの因子を受け継ぐ少年。

その後に続いて口を開いたのは―やはり背中に、空色に輝く凍て付く氷のような形状の両刃剣を背負った、空色の獅子獣人の少年。

彼は真紅の短髪の少年とは仲が悪い。とは言っても、単に馬が合わないと言う訳でもない……いわゆるライバル同士であり、共に旅をして来たこの1年の間、事在るごとに衝突を繰り返し、互いに腕を磨き、競い合って来た関係だ。

銀の長髪の少女「そうね、そんな日が少しでも早く来るように―頑張りましょう。」

虎獣人の青年「ああ！」

空色の獅子獣人の少年の言葉に、銀の長髪の少女と虎獣人の青年が微笑みながら同意。

―と、其処へ。光を反射する煌びやかな黄金の甲殻を持ち、足首近くまで覆う長い裾を持つやはり黄金の法衣に身を包んだ、老年の竜人族（ドラゴニュート）が姿を現した。

龍帝ゴスペル「そなた達もご苦労だった。
—今度もまた皆が力を合わせた事により、冥府の女王を退ける事が出来た。
少なくとも、もう争いが起きる事もないよ……その為に、また皆で手を取り合うのは大切な事だ。
……ところで、そなた達はこれからどうするのか…決めているのかな？」

このお方こそ、この龍帝国ドラゴリオンを収めている龍帝ことゴスペル・グラン・マイセン族長であり、そして———かつて千年もの昔、『ドラゴンフォース』のリーダーとして『エンブレムナイツ』と共に戦った老英雄にして、この時代では既に生きた伝説となった者。

通称・カイザードラゴン。より親しい者…主に子ども達はゴスペル様と呼ぶ。

真紅の短髪の少年「まあ勿論オレは、これからも竜戦隊の総隊長をやらせて頂くつもりですよ。
…ゴスペル様さえ、それで宜しければ。」

真紅の短髪の少年は、冗談交じりにゴスペルに対して言葉を返す。
自分はこれからも、貴方を主として傍に控え、共に生きて行くつもりだと—。

虎獣人の青年「色々と考えたのですが――――俺は、双月王国に戻った後…新たな百獣王になろうと決めました。」

そして、虎獣人の青年が発した言葉に……その場は驚きに包まれた。

龍帝ゴスペル「ほう…確か新たな百獣王の座は、獅座が受け継がずに保留していたと聞いているが……。」

不思議そうに、顎の先から垂れている長い髭をしごきながらはて…？と首を捻るゴスペル。

空色の獅子獣人の少年「…百獣王の座は、翔に託す事にしたのです。老師に正当継承者として認められたとは言え、侍として、男としてもまだまだ未熟……私はやはり、王の座に付く器では無いと。」

龍帝ゴスペル「そうか…更なる成長を目指したいと言うのかな？」

ゴスペルの問いに、空色の獅子獣人の少年は、ええ…と答えると、続ける。

空色の獅子獣人の少年「それに―今は、彼女と共に生きる方が……大切だと気づいたのです。」

そう言い、恥ずかしそうに銀の長髪の少女を見る、空色の獅子獣人の少年。

銀の長髪の少女「ええ―そう言う訳です。」

対して、ふふふ…と微笑みながら、銀の長髪の少女が応じる。

龍帝ゴスペル「2人は種族を超えて結ばれると言う事か…よきかな、よきかな！」

つまり――空色の獅子獣人の少年と、銀の長髪の少女は相思相愛の間柄と言う事で、これからは2人で共に歩んで行くと宣言している…と言う訳だ。

片や恥ずかしそうに俯いている空色の獅子獣人の少年、片や微笑みを浮かべる銀の長髪の少女―そんな2人を見ながら嬉しそうに、ゴスペルは大きく口を開き、笑う。

―この2人の逝く道に、幸多からんようにと。

真紅の短髪の少年「それじゃ、そろそろお別れだな。」

虎獣人の青年「ああ、そうしよう…いつまでもこうして話し込んでいたら、日が暮れても終わらないんじゃないか？」

虎獣人の台詞に、その場の全員が思わず大笑いしていた。

龍帝ゴスペル「それで…2人はこの地に残るのかな？」

空色の獅子獣人の少年「いえ。
私とフローラは、ハーメル一座と共に旅に出るつもりです。」

ゴスペルが、これから共に生きる2人に改めて確認すると―2人は旅に出ると言う。

真紅の短髪の少年「ハーメル一座に…って事は何か？
2人揃って旅芸人か……フローラはともかく……はっはっは、誰かさんの旅芸人姿は想像出来ないな！」

腰に手を当てて哂う、真紅の短髪の少年。

その言葉を聞きながら、空色の獅子獣人の少年は―こめかみを立てて、静かに怒りを燃やしていた。

空色の獅子獣人の少年「フン―これからは毎日お前の顔を見ずに済

む。
楽な暮らしになりそうだ。」
ただ単純に相手へ怒りをぶつけるよりも――キツイ皮肉でカウンターを返す。
空色の獅子獣人の少年は、少し捻くれた性分なのだった。
真紅の短髪の少年「ああ、オレもお前の皮肉を毎日聞かないで済むと思うと、心が躍るな～。」
軽い口調ながら確実にカウンターで返し、真紅の短髪の少年と空色の獅子獣人の少年はバチバチと火花を散らし、睨み合う――。
銀の長髪の少女「『いい加減にしなさい？』」
ふふふ…と微笑みながら（但し、目は据わっており全く笑っていない）銀の長髪の少女が、見るだけで相手を殺せそうな程に恐ろしい、キラースマイルで2人の少年を貫き、同時に両手で耳を思いっきり引っ張る。
彼女に抗議しようと、2人は不満そうな怒り顔で銀の長髪の少女に向き直るが―。

銀の長髪の少女「『―あら、何か文句があるのかしら？』」

口調は何時もと全く変わりは無いが、その代わりに恐ろしく座った目付きと冷えた声。

仮にも、多くの犠牲者達が眠る墓地とその慰霊碑の前で見苦しい言い争いをする2人の少年に対して本気で怒っているこの少女の剣幕に。

2人「……何でもない…。」

大人しく引き下がるしか無かったのだった。

いまだブツブツと愚痴を零している空色の獅子獣人の腕を取ると、銀の長髪の少女はツカツカと歩き出した。

銀の長髪の少女「さあ、行くわよ？
…私達には、新しい旅立ちが待っているのだから。」

…文句を言いたそうにしている空色の獅子獣人の少年だが、口では少女に適わないと理解している為に、余計な事を言うのはやめて大人しく引きずられて行く。

真紅の短髪の少年「…あれは完全に尻にしかれてるな……３０年ぐ

らい経って、ガキが生まれたとしてもきっとあのままなんだろうな――あの2人。」

本気で怒っている少女に対して、何も出来なくなっている空色の獅子獣人の少年――自分のライバルを見ながら、真紅の短髪の少年は…珍しく彼に同情しながら独りごちた。

虎獣人の青年「では―俺もここで。
じゃあな、ガイウス。
ゴスペル様…お元気で。
あまり、ご無理ばかりされてはなりませんよ？」

残った2人（主にゴスペル）に一礼すると、虎獣人の青年は親友と老英雄に一言だけ言葉を掛け、この土地の北に位置する祖国目指して丘を下って行く。

真紅の短髪の少年「翔も行ったか…さあて、ゴスペル様――オレ達も、そろそろ戻りましょう。」

虎獣人の青年が去って行く後ろ姿を、見えなくなるまで…何処か寂しそうに見送っていた真紅の短髪の少年は、何事も無かったかのように気を取り直して、ゴスペルと共に歩き出して行った。

ガイア新暦９７０年。冥王戦争と呼ばれる事となった大戦争を駆け抜けた４人の、新たな若き勇者達。

その別れは—やがて新たな、次の時代の勇者達の出会いへと繋がって行く。

しかしまだ、それはこの時誰も知らなかったのだが。

第０話　戦いの終わり、それは新しい時代の始まり（後書き）

＊えー、この物語は人間は元より、竜人、獣人など様々な種族が登場する王道ファンタジー路線の戦記物の序章です。

序章はこの物語の主人公となる４人の若者の出会いを描きながらゆったりしたペースで進んでいきますので、戦闘は殆ど無く主人公達を取り巻く状況や国、世界観などに付いての話が主となります。

本格的に物語が動き出すのは、帝国編・後半戦となる第１章からとなります。

解説してばかりになる話も有るかと思いますが、よろしければごゆっくりお付き合い下さい。

解説・属性設定（前書き）

ＳＥ戦記に置ける魔導などに付属する属性についての、簡単な解説です。

解説・属性設定

第０元素・鋼鉄

属性色・鋼色

原初より惑星ガイアそのものを構成する属性で、あらゆるものを構成する原子を司る。

第１元素・爆炎

属性色・赤色

世界で１番目に生まれた属性で、あらゆるものを燃やす熱量を司る。

第２元素・流水

属性色・青色

世界で２番目に生まれた属性で、あらゆるものを流す水流を司る。

第３元素・気流

属性色・緑色

世界で3番目に生まれた属性で、あらゆるものを吹き飛ばす気流を司る。

第4元素・凍結

属性色・空色

世界で4番目に生まれた属性で、あらゆるものを凍てつかせる冷気を司る。

第5元素・雷電

属性色・紫色

世界で5番目に生まれた属性で、あらゆるものを痺れさせる電流を司る。

第6元素・大地

属性色・茶色

世界で6番目に生まれた属性で、あらゆるものを揺るがす地盤を司る。

第7元素・閃光

属性色・白色

世界で7番目に生まれた属性で、あらゆるものを晦ませる光源を司る。

第8元素・暗黒

属性色・黒色

世界で8番目に生まれた属性で、あらゆるものを包み込む暗黒を司る。

第9元素・祝福

属性色・銀色

世界で9番目に生まれた属性で、あらゆるものを護る信仰を司る。

第10元素・呪詛

属性色・銅色

世界で10番目に生まれた属性で、あらゆるものを脅かす呪詛を司る。

第11元素・空間

属性色・金色

世界で１１番目に生まれた属性で、あらゆるものを位置させる空間を司る。

第１２元素・陽

属性色・橙色

世界で１２番目に生まれた属性で、あらゆるものを育む太陽の生命力を司る。

第１３元素・陰

属性色・黄色

世界で１３番目に生まれた属性で、あらゆるものを見守る月の精神力を司る。

第１４元素・混沌

属性色・灰色

世界で１４番目に生まれた属性で、あらゆるものを滅ぼす負の想念を司る。

登場人物紹介・第１部（ガイア新暦１０００年編）主人公（前書き）

＊この物語の主役、４人の若者達のプロフィールです。

登場人物紹介・第１部（ガイア新暦１０００年編）主人公

アベル・ゼノサキス

種族　後天性ドラゴノイド（ドラゴンの力を目覚めさせ、大いなる力を振るう者）

年齢　１５歳

性別　男性

先天属性　水・聖（後にもう１つの属性を得る）

使用武器　片刃・両刃を問わない片手剣の『二頭竜』

外見的特長　銀の髪に深い蒼の瞳（外見は人間の少年）・短髪

かつて『冥王戦争』を終結させた新たなる勇者、シーザーどフローラとの間に生まれた双子の混血児の弟。

誰に対しても優しく接する争いを好まない性格であり、見た目からは人間の少年にしか見えないが…外見と年齢に不相応な、強い意志と硬い覚悟を持つ一面もある。

第１の神子であり『太陽神ラー』の代行者の証、『太陽の聖痕（スティグマ）』の持ち主で３０年前の『冥王戦争』当時は母フローラの従兄弟、ガイウスが継承していた『日輪』の紋章の後継者と思われる少年。

聖痕及び紋章の位置は背中。

兄と共に帝都ラスタバンを訪れたのを切っ掛けに、大いなる宿命の荒波に飲み込まれて行く。

レグルス・ハーメル

種族　ハーフ・ワービースト（獣人寄りの、人間と獣人の混血児）・獅子

年齢　１５歳

性別　男性

先天属性　光・月

使用武器　刀・一刀流

外見的特長　硬めの尖った白い鬣（タテガミ）に空色の瞳・レモンイエローの毛皮

かつて『冥王戦争』を終結させた新たなる勇者、シーザーとフローラとの間に生まれた双子の混血児の兄。

弟とは違って現実的で人見知りが多い繊細な性格であるが、弟に対しては何かと面倒見のいい良き兄。

普段は獣人の姿であるものの、獣の力を扱えない新月の日だけは弟・アベルに瓜二つだが『目付きが悪い』とよく言われる、人間の少年の姿で過ごす。

第２の神子であり『双獣神・明昼』の代行者の証、『光月の聖痕』の持ち主で３０年前の『冥王戦争』当時は父、シーザーが継承していた『満』の紋章の後継者と思われる少年。

聖痕及び紋章の位置は右手の甲。

弟と帝都ラスタバンを訪れたのを切っ掛けに、大いなる宿命の荒波に飲み込まれて行く。

ラケシス・ヴァルハレビア・ヴァレンハイト

種族　人間（遠い祖先に幻獣神・麒麟との混血児を持つ）

年齢　１７歳

性別　女性

先天属性　水・聖

使用武器　細剣（レイピア）

外見的特長　銀の髪に深い蒼の瞳・ポニーテール

いよいよ明日に控えた『建国千年記念祭』を堪能する為に、南方大陸北東の人間の国『テスタメント共和国』から帝都ラスタバンを訪れた、アベルと同じ銀髪碧眼の少女。

何故か余り自分の素性を語りたがらないなど謎もあるが、非常に

お人好しであり面倒見が良く、隠し事が出来ない裏表の無い性格。

聖痕及び紋章の位置は右肩。

第３の神子であり『幻獣神・麒麟』の代行者の証、『水聖の聖痕』の持ち主で３０年前は双子の兄弟の母、フローラが継承していた『銀麟』の紋章の後継者と思われる少女。

帝都ラスタバンを訪れ双子の兄弟と出会ったのを切っ掛けに、大いなる宿命の荒波に飲み込まれて行く。

朔夜豪虎（サクヤ・ゴウコ）

種族　獣人・虎（南方大陸北部の獣人の国、双月王国の名家・朔夜家と関わりを持つ？）

年齢　１９歳

性別　男性

先天属性　闇・月

使用武器　手甲（本気で戦う際は身の丈以上もの太刀と長刀を用いる）

外見的特長　レモンイエローの毛皮に漆黒の縞模様、琥珀色の瞳・弁髪

アベル達３人が帝都見物の途中でトラブルに首を突っ込んでしま

った際に放っておけずに助けに入った、武術家を自認する虎獣人の青年で、双月王国の代名詞の１つである古武術『朔夜流獣拳技』を何故か習得している。

三流と言えどプロの傭兵である『暗黒の刃（ダークネス・ベイン）』を咄嗟の機転で退ける頭と腕を持ち、『義』の無い者は決して許さない真っ直ぐ過ぎるまでに無鉄砲、横柄で単純な熱血傾向の性格を持つ。

第４の神子であり『双獣神・暗夜』の代行者の証、『闇月の聖痕』の持ち主であったが彼の場合は既に『新』の紋章が継承されている為に過去形、因みに３０年前の『冥王戦争』当時の継承者は現在の双月王国の百獣王、朔夜翔虎。

聖痕及び紋章の位置は左手の甲。

帝都ラスタバンで聖痕を持つ３人の若者を助けたのを切っ掛けに、やはり彼もまた大いなる宿命の荒波に飲み込まれて行く。

記述・神竜について（前書き）

＊ＳＥ戦記における重要なバックグラウンド、地上世界の調和を司る存在である神竜についての解説です。

記述・神竜について

?.0・鋼鉄の神竜バハムート

地上世界そのものを構成する第0元素・物質こと鋼を司る神竜で、体色はメタリックグレー。

神竜は膨大な神力を生み出す源として『ドラゴニック・ソウル』と呼ばれる、神獣に置ける『精霊核（エレメンタルコア）』の役目を果たす神の臓である多面体のクリスタルを所有しており、バハムートのソウルは鋼色かつシリアルナンバー『0』が浮かび上がる。

後に産まれた『11体の守護神竜』の原型となった試作型であるが、その事実はおろかバハムートの存在そのものを知る者達は殆ど居らず、『創成戦役』から千年もの月日が経った今現在も行方不明。

竜人族としての姿と名前を使い、幾度も歴史上に現れていると言うが詳細不明。

彼は存在そのものが秘匿されている『ロストナンバー』である為、眷属は存在しない。

?.?・爆炎の神竜ジャバウォック

地上世界の『炎の龍洞』にて眠り続けている『11体の守護神竜』の1番目に当たる、第1元素・爆炎こと炎を司る神竜で、体色はレッド。

ジャバウォックのソウルは赤色かつシリアルナンバー『?』が浮かび上がる。

眷属に、赤い甲殻を持つ炎の竜人族・ジャバウォック一族が存在する。

?・?・流水の神竜リバイアサン

地上世界の『水の龍洞』にて眠り続けている『11体の守護神竜』の2番目に当たる、第2元素・流水こと水を司る神竜で、体色はブルー。

リバイアサンのソウルは青色かつシリアルナンバー『?』が浮かび上がる。

眷属に、青い甲殻を持つ水の竜人族・リバイアサン一族が存在する。

?・?・気流の神竜メガロード

地上世界の『風の龍洞』にて眠り続けている『11体の守護神竜』の3番目に当たる、第3元素・気流こと風を司る神竜で、体色はグリーン。

メガロードのソウルは緑色かつシリアルナンバー『?』が浮かび上がる。

眷属に、緑の甲殻を持つ風の竜人族・メガロード一族が存在する。

?・?・凍結の神竜フィーグムンド

地上世界の『氷の龍洞』にて眠り続けている『１１体の守護神竜』の４番目に当たる、第４元素・凍結こと氷を司る神竜で、体色はスカイブルー。

フィーグムンドのソウルは空色かつシリアルナンバー『?』が浮かび上がる。

眷属に、空色の甲殻を持つ氷の竜人族・フィーグムンド一族が存在する。

?・?・雷電の神竜ヴリトラ

地上世界の『雷の龍洞』にて眠り続けている『１１体の守護神竜』の５番目に当たる、第５元素・雷電こと雷を司る神竜で、体色はパープル。

ヴリトラのソウルは紫色かつシリアルナンバー『?』が浮かび上がる。

眷属に、紫の甲殻を持つ雷の竜人族・ヴリトラ一族が存在する。

?・?・大地の神竜ヨルムンガルド

地上世界の『地の龍洞』にて眠り続けている『１１体の守護神竜』

の６番目に当たる、第６元素・大地こと地を司る神竜で、体色はブラウン。

ヨルムンガルドのソウルは茶色かつシリアルナンバー『？』が浮かび上がる。

眷属に、茶の甲殻を持つ地の竜人族・ヨルムンガルド一族が存在する。

？？・閃光の神竜ナーガ

地上世界の『光の龍洞』にて眠り続けている『１１体の守護神竜』の７番目に当たる、第７元素・閃光こと光を司る神竜で、体色はホワイト。

ナーガのソウルは白色かつシリアルナンバー『？』が浮かび上がる。

眷属に、白の甲殻を持つ光の竜人族・ナーガ一族が存在する。

？？・暗黒の神竜ワイバーン

地上世界の『闇の龍洞』にて眠り続けている『１１体の守護神竜』の８番目に当たる、第８元素・暗黒こと闇を司る神竜で、体色はブラック。

ワイバーンのソウルは黒色かつシリアルナンバー『？』が浮かび上がる。

眷属に、黒の甲殻を持つ闇の竜人族・ワイバーン一族が存在する。

?・?・祝福の神竜アレキサンダー

地上世界の『聖の龍洞』にて眠り続けている『１１体の守護神竜』の９番目に当たる、第９元素・祝福こと聖を司る神竜で、体色はシルバー。

アレキサンダーのソウルは銀色かつシリアルナンバー『?』が浮かび上がる。

眷属に、銀の甲殻を持つ聖の竜人族・アレキサンダー一族が存在する。

?・?・呪詛の神竜ロプトウス

地上世界の『魔の龍洞』にて眠り続けている『１１体の守護神竜』の１０番目に当たる、第１０元素・呪詛こと魔を司る神竜で、体色はカッパー。

ロプトウスのソウルは銅色かつシリアルナンバー『?』が浮かび上がる。

眷属に、銅の甲殻を持つ魔の竜人族・ロプトウス一族が存在する。

?・?・?・空間の神竜マイセン

地上世界の南方大陸南部中央、龍帝国ドラゴリオンの帝都ラスタバンの遥か地下に存在する『天の龍洞』にて眠り続けている『１１体の守護神竜』の１１番目に当たる、第１１元素・空間こと天を司る神竜で、体色はゴールド。

『１１体の守護神竜』の内、皮膜のあるコウモリ型では無く、唯一彼だけは巨大な天使の翼を持ち、これは眷属であるマイセン一族にも特徴として受け継がれている。

マイセンのソウルは金色かつシリアルナンバー『？？』が浮かび上がる。

眷属に、金の甲殻を持つ天の竜人族・マイセン一族が存在する。

龍帝国ドラゴリオン初代参謀長
マルス・クルツ・アレキサンダー　記

記述・神竜について（後書き）

と言う訳で、最も重要な主人公達のプロフィールと、複雑になりすぎないように最低限の用語解説をしてみました。

…まあ別に用語が分からなくても、話の流れさえ把握出来ていれば大丈夫……なように書くつもりですので、用語なんて一々覚えるのめんどくさい！とゆー人は流し読む程度にしちゃっても結構です！w

第1話　双子の兄弟と両親の過去（前書き）

＊いよいよこの物語の主人公である双子の兄弟が登場し、両親の昔話を切っ掛けに旅が始まります。

第1話　双子の兄弟と両親の過去

序章　―兄弟の旅立ち―　上・2

―ガイア新暦１０００年―
北方大陸南部　オアシス・ネストヴォルフ
　フローズヴィニトル家・部屋

シーザー「来たか。」

時はガイア新暦１０００年。

『冥王戦争』の勇者達が互いに別れを告げて、新たな道を歩き出してより３０年もの月日が経っていた。

北方大陸の南部地帯、その中央に存在する『餓狼族』と呼ばれる赤あるいは銅色の毛皮を持つ、特殊な狼獣人が住むオアシス。

そこに…世界中を巡業している旅芸人達、ハーメル一座が逗留していた―――。

アベル「来たよ、父さん。
…言われた通り、兄さんも連れて来たけど……それで、大事な話って何のこと？」

ハーメル一座が逗留しているオアシス・ネストヴォルフの族長一家、『赤銅の餓狼神』と呼ばれる旧世界を守護していた神獣の内の1体に数えられる、巨大な狼の姿をした古代神フェンリルの子孫である狼獣人が住むこの土地の族長の家に、ハーメル一座の一員である旅芸人、シーザー・ハーメルがいた。

フローズヴィニトル家に入って来たのは、美しい銀の短髪と海のように深い蒼の瞳を持つ—蒼のワイシャツの上に前を開けたまま銀のベストを纏い、銀糸のジーンズを履いた少年。
年は15。シーザー・ハーメルの次男であり名をアベル・ゼノサキス。

性が父親と違っているが、これは別に夫婦仲が険悪な為ではなくこの性は母親のものであり……彼が面影や髪・瞳の色からして何もかも母親似であり、筋骨逞しい空色の獅子獣人である父親には全く似ていないスラっとした体格であり、非常に見目麗しい外見である事。

そして—『アベル・ハーメル』と言うフルネームが少々呼び辛く『アベル・ゼノサキス』と言うフルネームの方がしっくり来ると言う母親の発言から、こう名乗る事となっただけだ。

レグルス「父さんがいきなり、大事な話って言い出すなんて…。
珍しいって言うか、一体どうして？」

アベルの後から、フローズヴィニトル家に入って来たのは。

空色のシャツの上に純白のレザージャケットを纏い、レモンイエローのレザーズボンを履いて黒光りするベルトを巻いている獅子獣人の少年。

年はアベルと同じく15。シーザー・ハーメルの長男であり名をレグルス・ハーメル。

彼の性は父親のものであり、獅子獣人であるその姿を見れば分かるように――遥かに彼は、弟であるアベルよりも父親の血を色濃く受け継いでいる。

最も、彼の鬣や毛皮は父親のような空色ではなく―淡い黄色の毛皮に純白の鬣を持っていた。

これは『先天属性』の違いによる。父親であるシーザー・ハーメルの先天属性は『第4属性・冷気』―すなわち通称、氷と呼ばれる属性である。

対して、双子の兄弟の母親でありシーザー・ハーメルの妻、フローレンス・ヴァルハレビアの先天属性は『第2属性・流水』と『第9属性・祝福』―通称・水と聖であり、次男アベルと同じでもある。

これを鑑みれば、アベルがどれだけ母親に良く似ているのかが一目瞭然であり、母親の外見的特徴は今更説明するまでも無い事はお分かり頂ける事と思う。

兄であるレグルスは獅子獣人の姿をしている事から、どちらかと言えば父親に似ているのだが――彼が持つ先天属性は父よりもランクが上である『第7属性・閃光』と『第12属性・陰』―通称、月。

彼が父から受け継いだ血は、父が発現しているものよりも遥かに色濃く……彼の中で目覚めていた。

この原因は、父・シーザーの一族が受け継いでいる『因子』が完全に発現する確率が極めて低い事にある…が、何故かレグルスはまるで示し合わせたかのように、父が決して持つ事が出来なかった力を持っていた。

シーザー「…そう緊張するな、ただの昔話だ。
お前達2人は、今日で15歳……私の故郷ではな、15で大人の仲間入りをさせる『元服』と言う風習が存在する。
――だから、いい機会だと思った……まだ話していなかったからな…私達が、今のお前達とそう変わらない年頃に……どんなものを見て、何をしていたのか。」
そして、父は話を始めた。

―人見知りな自分が、唯一無二の親友である虎獣人の青年以外に心を許せるようにまでなったライバルと……今は妻となった女性と出会い、共に……旅をしていた、あの若き青春時代の事を。

アベル「うん、分かった。
そう言う事なら、聞かせてもらうよ。」

レグルス「父さんと母さんの昔の事とか……言われてみれば、オレもアベルも何も知らないんだよな…。」

ただ、静かに父の言葉を待つアベル。

父の言葉で、改めて両親の経歴を知りたいと思うレグルス。

シーザー「アベル…よく本を読むお前ならば、『冥王戦争』と呼ばれる歴史上の出来事がどのような争いだったのか、言わずとも知っているな？」

アベル「今から３０年前、この世界を滅ぼそうとした冥府の女王・ヘルと―――千年前、『邪悪なる龍神』……冥府神ティアマットを打ち倒した英雄達の子孫が中心になって戦い、冥府の最下層、最終地獄ジュデッカでの死闘の末に…打ち倒した。
確か、新しい勇者達は４人いて……ライバル同士だった２人の少年が、それぞれ『炎』と『氷』の精霊核の、この時代の所持者だったとか…そのぐらいしか。」

そのぐらい、とアベルは言うが―これだけ簡潔かつ要領が良く、分かり易い説明は見事としか言いようが無いと言える。

シーザー「そうだ、その通りだ。
―そして、『氷の精霊核』は私の元に今も在る……私の言いたい事が分かるな？」

次男の説明に満足した父は、首に掛けている―静かな空色の神力（フォース）を放つ『氷の精霊核（エレメンタルコア）』を取り出した。

『氷の精霊核』は黄金のチェーンとそれを繋ぐ、金色の3本爪を模した形の装飾に嵌められた状態で彼の首から下がっている。

……世界が平和になり、戦いを終えたシーザーは『氷の精霊核』を自らが望んだ武器の姿から、本来の宝玉の姿へと戻し―いつも、首から下げていた。

アベル「もしかして……父さんが……冥王戦争の、勇者の1人だった―？」

腕組みをして考えながら、アベルは父が言わんとしている……その答えを、導き出した。

レグルス「『じゃあ――父さんがいつも首から下げてるその宝玉が、本物の……『氷の精霊核』って事なのか！？』」

自分達の父が、30年前の『冥王戦争』を終結させた新たな勇者達の1人であり、この時代の『氷の精霊核』の所有者である。

シーザー「ああ、その通りだ。
私は元々……南方大陸北部に存在する、かつて『元祖エンブレムナイツ』に名を連ねていた伝説の英雄、望月礼恩（モチヅキ・レオン）が初代八大百獣将と共に築き上げた獣人族（ワービースト）の国……双月王国の出身だ。」

双月王国に住む獣人は、例えば『望月礼恩』と言うように、龍帝国ドラゴリオンやテスタメント共和国と言った隣国とは違い、変わった名付け方をする。

この場合は望月が性であり、礼恩が名前となる。

シーザー「祖国を訪れた『日輪』の紋章の継承者ガイウス・ゼノサキス、『幻麟』の紋章の継承者フローレンス・ゼノサキスと出会い……。

私の唯一の親友である、月神・双獣神の夜と闇を司る片割れ『新（アラタ）』の紋章の継承者である朔夜翔虎（サクヤ・ショウコ）と共に…もう1つの昼と光を司る『満（ミチル）』の紋章の継承者である私は、冥府の女王・ヘルを討伐する旅に出た。

そして、進む先々で暗躍していたヘルの手先を倒しながら世界中を回り、警告すると共に決戦の準備を整えた私達は……かつてのエンブレムナイツの子孫である私達4人、何処からか姿を現し力を貸してくれた伝説の英雄バハムートとフェンリル、神竜の眷属の族長達、老英雄『ドラゴンフォース』が率いる、神竜の血筋を問わない数多の竜人族（ドラゴニュート）や巨竜族（ドラゴン）。

そして—私達が旅をしている間に整えた世界中の国々の戦力……つまり、この世界の総力を結集した勢力『ガイアガーディアン』を結成する事によってヘルの領域である冥府へ乗り込み、死闘の末にようやく、冥府の女王を倒す事が出来た。」

父親が始めて語るかつての仲間達との出会い、そして世界中を巡る旅———最後に、このガイアに生きる命全てが力を合わせて冥府の女王・ヘルを倒す事が出来た、と言う冥王戦争の真実。

アベル「―かつて邪悪なる龍神……古代神ティアマットを倒した、千年前の『創成戦役』のように？」

息子の言葉に、父はそれ以上何も言う事なく―ただ、静かに頷く。

何も言う必要は無い。何故ならば、それが真実なのだから―。

フローラ「そう……ありとあらゆる生き物が、自分達を護り育んでくれた世界を、今度は自分達の手で護る為に心を力を１つにした―とても壮観だったわよ、大小さまざまな世界中の生物が混ざり合って再び結成された『ガイアガーディアン』の光景は。

とまあ、ヘルを倒した後……私達は、やがてそれぞれの道を歩んだわ。

そして、私とシーザーは新しい時代を迎えた世界をもっとゆっくり見て回る為に、旅の途中で知り合った旅芸人の一座に飛び込んで――それから３０年も、ずっと旅を続けている訳なのよ。」

レグルス「じゃあ母さん、どう考えたって４０歳は越えてる……よな…。

オレとアベルが今１５歳で、父さんが４８で冥王戦争が３０年前なんだから…つまり……どう見積もっても４０歳以上…。」

話を聞いていたのか、いきなり入って来た腰まで掛かる銀の長髪をストレートに下ろし、深い海のような蒼の瞳を持つ女性――２人

の母にしてシーザーの愛妻であり、冥王戦争当時の『幻麟』の紋章を継承者であった、フローレンス・ヴァルハレビア・ゼノサキス。

ふとした疑問を抱いたレグルスは、母親の年齢を計算してみた。

―が、次の瞬間。

フローラ「ふふふ……レグルス、レディの年齢は聞かないものよ？」

口調も、表情も一見笑っているように思えるし、そう見える。

しかし―勿論、視線を交わしただけで、相手を精神的に殺せそうなこの彼女の事。

この行為が最大級の脅迫である事は、わざわざ言うまでもない。

レグルス「いや、母さんとっくにレディって歳じゃないんじゃ…。父さんが４８って事は、間違いなく母さんも４０は軽く越えてる――。」

しかし、レグルスはデリカシーと言うものに少々掛けている節があった。

アベル「兄さん…それ以上は言わない方がいいよ。

……母さんが本気になったら、上級の攻撃用ドラゴン・ロアーが

発動しかねないから…。」

そこへ、弟であるアベルが兄と母、両方のやり取りに苦笑しながら的確なフォローを入れる。

　これは細かい配慮が苦手な、どちらかと言えば常に本音で生きているレグルスが兄であるアベルが、母親似であり細やかな配慮が得意な事から自然と見に付けたものであった。

シーザー「（確かにな……フローラはある意味、怒らせると太陽神ラーよりも恐ろしい……。）」

フローラ「あら、シーザー？
　今何か、失礼な思考をしなかったかしら……？」

　次男が兄へ向けたフォロー中での、本気になった母親についての恐ろしさに心の中だけで同意していたシーザーだったが、直後にフローラに見抜かれてしまっていた。

シーザー「き…気のせいだろう。
　それより――だ。
アベル、レグルス……私の話はこれからが本題だが…2人とも、以前から力律士（フォーサー）になりたいと言っていたな？」

何とか最大の危機を誤魔化した父親が本題に入ると言い出し、今までで一番緊張した面持ちで耳を済ませていた兄弟は―父から、一番意外な言葉を聞いた。

レグルス「確かに、なりたいけど―だって、オレとアベルがいくら力律士になりたいって言っても、ずっと母さんも父さんも、揃って反対してたくせに……それが、どうしていきなり？」

シーザー「先程も言ったが、私の祖国には１５歳で成人とする風習が在る。
それは、長い間―獣人同士での謀反や、隣国の侵攻の危険に晒されていたからこそ生まれたものだが……その話をすると横道に逸れてしまうので今は省くが。
要するに、今日からはお前達２人を大人として見る事にした、と言う訳だ。
…好きにしろ、但し一切私とフローラは甘やかさない、どれ程大変だろうが手を差し伸べる事もしない―――それでもいいなら、旅立て。」

父の意外な、そして内容そのものはああ、やはりそう来たか―と言ったような言葉に。

アベル「うん、分かった。」

アベルは、実にあっさりと了承した。

レグルス「お前な―あっさりし過ぎてないか？」

アベル「……だって、兄さん。
力律士になったら、いつかは大きな依頼で世界中を回る事になったりもするかも知れないじゃないか。
いつまでもずっと、兄さんとコンビを組んでいるかどうかも分からない。
やっぱり、最後に頼りになるのは……ずっと積み重ねた、自分自身だと思う。」

物凄くあっさりと、父親の厳しい条件に同意した弟を見ていて呆れる兄。

しかし、アベルは―更に家族を驚かせる事を言い出した。

シーザー「（あのお調子者と同じような事を言う―やはり、アベルの中にも……ゼノサキスの血が流れていると言う事か…。）」

そんな次男を見ながら、父は思い出す。

最初はとにかく事在るごとに衝突ばかりしていたが…何時しか互いに実力を認め合うようになったものの、性格だけは完全に受け入れられずにライバル同士として、最後まで競い合った―――この世界最高の、伝説級の勇者を生み出して来た『ゼノサキス』の性を背

負ってあの冥王戦争を戦い抜いた、炎の精霊核のこの時代の所有者の事を。

レグルス「そうだな…力律士になりたいって思ったのも、オレ達が一座を離れて、どこまでやれるか――何が出来るのか試してみたくなったからなんだよな。
よし、やってみるか！」

アベル「うん―兄さんなら、そう言ってくれると思ったよ。」

弟の言葉を聞いた兄は、自分達がどうして力律士になりたいと思ったのかを改めて口に出すと、決意を新たにした。

そんな兄に微笑むと共に同意する弟。

フローラ「（あらあら…物凄くあっさりと決まったわね……流石は私達の息子と言うか、これは素直に喜んでいいものなのかしらね……。）」

シーザー「（…2人は、今正に好奇心旺盛な年頃だ……多少強引にでも一座を離れさせ、多くのものを見聞きさせようと思っていたが――余計な心配だったか。）」

まだまだ子どもだと思っていたにも関わらず、思いがけない成長

を見せて、また一歩大人に近づいた息子の姿を見て、苦笑しながら複雑な心境を抱く母。

全く逆に、息子の成長を見せ付けられて嬉しそうに微笑む父。

レグルス「それはいいとして、まずはどこに行くんだ？」

アベル「やっぱり僕は、せっかくだから龍帝国ドラゴリオンへ行ってみたい。
ほら、今年ももうすぐ建国千年記念の―何時にも増して大掛かりな祭典が催されるらしいから。」

そんな両親を差し置いて、双子の兄弟は早速旅の行き先を話し合っていた―――。

―次の日―

ハーメル一座のテント

そして次の日の早朝。アベルとレグルスの双子の兄弟は……旅立ちの準備を終えて、今正に―このオアシス・ネストヴォルフに逗留しているハーメル一座……生まれてこの方、半年と同じ場所に定住していた試しの無い2人が…新たな旅立ちを迎えようとしていた。

フローラ「さて、2人とも―いきなり行く当ても無く放り出すのは流石に過酷にも程があるだろうから……これを持って行きなさい。」

兄弟は、母から幾つかの書状を手渡された。

全部で3つあるそれは、それぞれに宛先が違っていた。

アベル「ゴスペル・グラン・マイセン様へ、朔夜翔虎様へ、ゲオルグ・ヴァルハレビア・ヴァレンハイト様へ―。

この名前って……南方大陸の三国それぞれの国家元首の…。」

それを見たアベルは、理解した。

これは―――両親が生まれた故郷である南方大陸の3国それぞれを率いる国家元首に宛てた書状だった。

龍帝国ドラゴリオンの龍帝、ゴスペル・グラン・マイセン。

双月王国の百獣王、朔夜翔虎。

そして、テスタメント共和国の大統領、ゲオルグ・ヴァルハレビア・ヴァレンハイト。

シーザー「そうだ……旅ついでにまずは南方大陸へ赴いて、3国そ

れぞれの国家元首に直接手紙を手渡し言葉を交わしてくれば…何か見えてくるものもあるだろう。
旅立て、そして—何時の日にか必ず帰って来い。
……成長したお前達の姿を見るのを、楽しみにしているぞ。」

これから力律士（フォーサー）となる事を目指す息子達が、かつて若き日に自分達と共に戦った—故郷である南方大陸、その三国の国家元首と出会い、言葉を交わせば……何かを感じ取ってくれるかも知れない。
そう言うと——父は、旅立つ息子達の頭へと同時に、優しくその大きな掌を乗せてクシャクシャと撫でる。

アベル・レグルス「『…行って来ます！』」

父に撫でられながら、双子の少年は—別れではなく、再会の為の叫びを上げた。

新たなる勇者達が紡ぐ、過酷なる宿命の荒波を切り裂いて進む—次なる物語の全ては、ここから始まる——。

第1話　双子の兄弟と両親の過去（後書き）

……思いっきりな王道的展開から、いよいよ物語が始まります。
えー、ベタな展開ですが作者はこう言う王道的展開は大好きなのです！

あと、たぶんフローラとシーザーがなんだかんだ言ってバカップルなのは、こんな仲のいい夫婦が両親だったら楽しいだろうなーと言う個人的願…ゲホゲホ。

ちなみに両親は話題に昇る事はあっても、多分あんまり登場しません。
成長の為に兄弟を旅立たせた訳ですから、今は子を持つ親となり、ただの旅芸人として過ごしているこの二人がもし動くとすれば――恐らくその時は、座視していられない状況になった時だけでしょう。

第2話　上陸、龍帝国ドラゴリオン（前書き）

惑星ガイアの南に位置する南方大陸南部の竜人族の国『龍帝国ドラゴリオン』にやって来た兄弟はそこで、とある少女と出会います。

第2話　上陸、龍帝国ドラゴリオン

序章　―兄弟の旅立ち―　上・3

―1週間後―

龍帝国ドラゴリオン・帝都ラスタバン
東区・マイセン空港

レグルス「それにしても……北方大陸南部のネストヴォルフから南方大陸南部の国の首都まで、飛空艇の移動時間だけで考えてもたった1日ぐらいで来れるのか―本当に凄いな、心力機関（フォースマシン）は。」

レグルスとアベルの兄弟は、龍帝国ドラゴリオンの首都である―中央、マイセン地方そのものを超・巨大都市化した帝都ラスタバンへと降り立っていた。

彼等は直接、北方大陸南部の南端に存在するネストヴォルフ空港から飛空艇に乗り―――この龍帝国ドラゴリオンの帝都ラスタバンへとやって来た。

補足しておくとこの飛空挺の搭乗費用は、ハーメル一座の座長であるヴァイク・ハーメルが自分のポケットマネーから、旅立つ2人への餞別として出してくれたものだった。

アベル「うん、やっぱり心力機関（フォースマシン）は便利だと思う。
飛空挺なんて、その最たるものだけど――――もっと腕が上がったらいつか、自分達の足で世界を旅するようになりたい。」

レグルス「ああ、そうだな―昔の父さんや母さん達みたいに。
色んな場所を巡って、色んなヒトに出会って……オレ達だけで旅してみたいよな。
その為にも今は、南方大陸の三国を……オレ達の足で巡らないとな。」

心力（フォース）とは、この惑星ガイアに生きる全ての生物が、大なり小なり持っている、生きる力の源である生命力と魔導の源である魔導力と精神の強さの源である精神力を体内で結合・循環させて生み出す、龍神が扱う意味―即ち概念を持つ言語、竜言語を幾つも組み合わせる事によって様々な現象を起こす超高等魔導、ドラゴン・ロアーを引き起こす元となる高純度の複合精神エネルギーであり。

生命が体内で結合・循環させる過程を擬似的に機関（マシン）で再現したものである為に、心力機関と呼ばれる。

兄弟は心力機関の利便性の高さを改めて実感させられたものの、やはり何時かは己の足で世界を歩き、己の目で世界を見聞きしたいと再確認していた。

アベル「さて、と―帝都ラスタバンに着いた訳だけど……。」

レグルス「……ここが、歳取るほど体が大きくなる竜人族(ドラゴニュート)が、千年も掛けて大きくしてきた都か…普通の建物の大きさ1つでも、人間用の2倍は軽くあるんだな……。
しかも、この帝都ラスタバンは少し離れた所にも、ぐるっと帝都を取り囲むみたいにしてまだ10も別の都市地区があるって言うんだから…凄いとしか言いようがないな。
この帝都ラスタバンだって、見渡す限り都が広がってるしな…迷わないように気をつけないと、すぐに迷子になるぞコレ。」

初めて訪れた、帝都ラスタバンの余りのスケールの大きさに当てられ、圧倒されてそして呆れながらも…兄弟は、自分達が旅芸人の一座に生まれて、幼い頃から旅慣れしていてい本当に良かったと心から思ったのだった。

アベル「うーん……でもまずは、何とかこの国の中心—ドラゴンキャッスルへ行かないと。
道具屋にでも行って、帝都の地図を探そうよ、兄さん。」

レグルス「それが良さそうだな—こんなに広いんだ、地図ぐらいあるだろ。」

そして、道具屋を探して——空港を出た2人が帝都を歩き始めると。

レグルス「竜人族ばっかりとか言うレベルじゃないな……人間や獣

人も見かけるけど、やっぱりオレ達みたいな建国千年記念祭目当ての観光客や、その観光客を目当てにした商人とかなんだろうな。」

アベル「うん、僕もそう思う。
……あ、兄さん—あそこに道具屋があるよ。
入ってみようか。」

横幅、５０m—縦の長さは地平線の彼方まで軽くあろうかと言うその大通りの広さと、始めて見る竜人族ばかりで埋め尽くされた光景に兄弟が当てられていると。

アベルが目的の道具屋を発見し、兄弟は早速足を運んだ。

帝都ラスタバン・東区
道具屋『エイブラ海運・帝都出張店』

若い青の竜人族の女性「おや、いらっしゃい。
—帝都は初めて、しかも迷いそうで困ってる……そんな所じゃないかい？」

道具屋の店員は、竜人族で言えばまだ成竜（おとな）になったばかりであろう—海を思わせる青の甲殻に包まれた、若い竜人族の女性であった。

アベル「どうして分かるんですか？」

若い青の竜人族の女性「そりゃ、分かるさ。
アンタ達の顔にそう書いてあるんだ。」

店員らしきその若い竜人族の女性に図星を付かれ、兄弟は同時に顔を真っ赤にした。

若い青の竜人族の女性「からかって悪かった。
ただ、あんまりにも初々しかったからさ……ちょっとからかいたくなっちまったのさ。」

レグルス「初対面の、それも年下の子どもをからかうなんて―成竜(おとな)のする事じゃないんじゃありませんか？」

からかわれた事に怒った兄・レグルスはすぐさまその若い竜人族の女性に喰って掛かる。

若い青の竜人族の女性「まあまあ、そんなに怒らないでおくれよ。
ほら、地図が居るんだろう？―持って行きな。」

レグルスの言う通り、年下の子どもをからかった事への侘びなのか――若い竜人族の女性は帝都ラスタバンの地図を、2人に投げて寄越した。

アベル「いいんですか？
…売り物ですよね？」

若い青の竜人族の女性「はは、子どもが細かい事を気にするんじゃないよ。
アンタ達みたいな2人旅初心者丸出しな子どもから金を取ったら、我がエイブラ海運の名折れってもんさ。」

幾らからかわれた事への侘びとは言え、商品をタダで貰う事に抵抗を示すアベルを見た若い竜人族の女性は楽しそうに笑い――気にしないでいいから持って行け、と2人を気前良く後押しした。

アベル・レグルス「有難うございます。」

若い青の竜人族の女性「礼を言われる事じゃないさ。
それより、こんな時は性質の悪い――――アンタ達みたいな初心者をカモにする下種どもが増えるからね…気をつけな！
あと、区同士を行き来する時は、ちゃんと転移サーヴィスを使うんだ。
アタシ達から見れば普通なんだけどね…歩きで帝都を踏破するのは、人間や獣人にはちょっと大変だろうさ。」

アベル「はい……何から何まで、お世話になりました。

それじゃ行こうか、兄さん。」

アベルは改めて、丁寧に若い青の竜人族の女性に礼を言うと――兄弟は、再び帝都ラスタバンの大通りへと足を踏み入れた。

レグルス「ああ―さっさと、ドラゴンキャッスルに行かないとな。寄り道してたら、その内いつのまにか夜になってそうだぞ……コレ。」

青い竜人族の店員「社長、店番をさせてしまって申し訳有りませんでした！
出店する店の数と、品物の確認は流石に大変でして…。」

若い青の竜人族の女性「別にいいさ、こうやって店に出ると―社長やってる時よりもいい経験になる。
たった今、初心者丸出しな雰囲気の――初めて会ったにしてはどう考えてもそうは見えない、どっかで見たような顔の兄弟に会ったしさ。」

社長と呼んだ、若い青の竜人族の女性の言い分に…はあ？と訳が分からずに首を傾げる、本来の店員らしき青い竜人族。

青い竜人族の店員「お知り合いですか？」

若い青の竜人族の女性「直接見知ってる訳じゃないさ。
ただ―そう、似てたのさ。
３０年前、冥府の女王と直接戦い……打ち倒した新しい勇者の内の２人に。
フローラちゃんに良く似た顔立ちの弟に、シーザー坊やに良く似た獣人の兄。
フローラちゃんから、手紙を貰ってるゴスペル様に聞いた話とも一致するからね…１５歳になったばかりだって言うし、年頃も合ってる――間違い無いだろうさ。」

社長―そう呼ぶ若い青の竜人族の女性の説明に、店員は驚愕した。

青い竜人族の店員「と言う事は…フローレンス・ヴァルハレビア様と望月獅座様の息子が、建国千年記念祭を明日に控えたこの時に……帝都ラスタバンへ訪れていると？」

若い青の竜人族の女性「ああ、そう言う事になるね。
しかし……テスタメントの大統領の娘がお忍びでこのラスタバンに来てる、って言う裏情報もある。
―何か、途方も無くでかい嵐の前触れみたいに思うのは……流石にアタシの考え過ぎだろうさ。」

かつて、冥府の女王ヘルと直接対峙した、６人の勇者。
その内の５番目と６番目の勇者は―――かつて『元祖エンブレム

ナイツ』に名を連ねていた『餓狼神フェンリル』と『鋼鉄の神竜バハムート』。

古の時代の、歴史の闇に消えて行った英雄が何処からか姿を現し―新しい勇者と共に戦ってくれた。

新しい勇者、即ち。

『太陽神ラー』の『日輪』の紋章の継承者であり、『元祖エンブレムナイツ』のリーダーであり我等『ドラゴンフォース』の戦友でもある『ランドール』の子孫である竜剣士（ドラゴンブレイダー）ガイウス・ゼノサキス。

『幻獣神・麒麟』の『幻麟』の紋章の継承者であり、ランドールと同じく紋章騎士『レイミーア』の子孫である召喚師（サモナー）フローレンス・ヴァルハレビア。

『双獣神・明昼』の『満』の紋章の継承者であり、紋章騎士『礼恩』の子孫である獣剣士（ビーストブレイダー）・望月獅座。

『双獣神・暗夜』の『新』の紋章の継承者であり、紋章騎士『王虎』の子孫である獣拳士（ビーストバトラー）・朔夜翔虎。

この４名の内、３名の後継者足り得るであろう子ども達が、かつて『元祖エンブレムナイツ』や『ドラゴンフォース』が中心となり世界中全ての命が終結して『冥府神ティアマット』を打ち倒し、新たな世界を創ってより千年の時を無事に迎えた事を祝う、龍帝国ドラゴリオンの建国千年記念祭を明日に控えたこの日に、千年前の暗黒時代は我等の拠点であった帝都ラスタバンへ集いつつあると言う。

そう、まだ誰も知らない。古き時代の終わりは、新しき時代の始まりを告げる鐘―。

つまり、ここから新たなる……戦争と言う悲劇の歴史が、それを終結する為に―宿命に導かれるかのように集った、若者達の長い『自分達なりの戦いを貫く』物語が、幕を開けると言う事を。

第2話　上陸、龍帝国ドラゴリオン（後書き）

いよいよ目的地である、龍帝国ドラゴリオンの中枢であり『龍帝』カイザードラゴンの膝下である帝都ラスタバンへとやって来たアベルとレグルスですが。

次はいよいよ、この物語のメインヒロイン・ラケシスが登場します！

天真爛漫な彼女が持つエネルギッシュなまでの行動力は、二人に取っての助けになるか否か！

……うん、ちゃんと役に立ってくれる筈です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0053o/

スピリット・エンフォーサー戦記１００５　序章　―兄弟の旅立ち―

2010年10月28日21時38分発行